

<特集：ツアーで出会う>

## どこでもドアを通るとからだが軋む話

古川ちかし

### 1. どこでもドアをポンと置いてみる

ドアというのは境界を区切るんだけど通るためのもので、通るために作られているんだけど境界を区切るもの。ドラえもんがポケットからひょいと取り出してポンと置くと、どこかを通じるドア、どこかところを区切りながらも通じさせるドア—どこでもドアが出現する。ナルニア国物語<sup>2</sup>に出てくるワードローブにも一応ドアはあったけど、あれは固定されているし、向こう側に出る本当の境界は毛皮やコートの中にあって境界そのものは何か曖昧だった。その点、どこでもドアは、なんとも明快だ。

例えばパック旅行—パック旅行では、誰かが（業者が）念入りに計画したものを、参加したい人が「こっちがいいかな、あっちかな」と言いながら選ぶ。選ぶ人は、そこへの道程を頭の中で少しずつ作り上げながら徐々にそこに到達するのではなく、ポンとそこに置かれた「どこでもドア」を選んで、その一つをくぐり抜ければ一気に向こう側に行ける。

例えば私たちが呼ぶところの「ツアー」も、日常から地続きに徐々に自力で一歩一歩からだを慣らしながら…、ではなくて、そんな「どこでもドア」を一気にくぐる。一気にいくから、行った先の向こう側に上手に適応なんかできっこない。パック旅行では、だからいろんな手当てが用意される。向こうでもこっちと同じような日常が用意されていたり、（サファリパークの乗り物みたいに）ツアー参加者だけを囲い込んで動くとか、ツアーガイドさんがいてすべての向こうとの接触どこでもドアを通るとからだが軋む話を肩代わりしてくれる、とか。そういうツアーには人気がなくなってきているのかもしれないけれど、まだそういうのはたくさんある。

「向こう側に上手に適応なんかできっこない」ことから生じる頭とからだの軋み（きしみ）というか、適応不全のようなものが、「ツアー」の醍醐味なのかもしれない。軋まないようにそこに「いろんな手当て」が用意されてしまわないことが味噌なのかもしれない。

### 2. 軋（きし）む

軋む—その1）だって自分のことだし分かってるから…目の前にそういう人がいたら、きっと私は思う。ああ、かわいそうだなって。ああ、かわいそうだなって思って、それが顔にも出てくる。で、きっと、そういう自分が嫌だと思って、その気持ちを隠そうと思う。隠そうとしていることが、また顔にも身体にも出てくる。頭では分

かるよ、かわいそうだななんて思うのは思い上がりだって。でも、きっとそう思って、そういう自分が嫌になる。だから、障害者とは会いたくないんだ。…

Tは言い切った。言い切って、手の平でポンと机を叩いた。彼女の脳裏には、鮮明に自分自身の姿が映し出されていたのかもしれない—脳性まひの女性がいて、その横で居心地悪そうにたたずむ自分自身の姿。YはそんなTの視線を捉えると、すぐに反論を発射。

「私は会ってみたい。Tはそう言うけど、本当に会ったら、今思っているのとは違った顔が出て来るかもしれないよ。だって、今のは想像でしょ。」

「想像じゃないよ。そういう経験をしてきたから、分かる。」

「でも決めつけてる・・・」

「うん、決めつけるよ。だって、自分のことだし、分かってるから。」

「私は分からないな。」

雲林にある内政部の養護施設を訪問しようというツアー計画が持ち上がり、私たちは訪問して何をしようかと討論していた。TとYは大の仲良しだ。その二人の間で意見が割れた。

一週間後、養護施設を訪問した。

当初、積極的に”障害者”の間を動き

き回ったのはTだった。訪問した学生

たちと施設に収容されている女性た

ちとで一緒に簡単な踊り（体操）をし

たりする。Tは音頭をとり、動きが分か

らずにおろおろしている人たちの間

を駆け回った。Yは隅の方において、踊

りに身体をあわせてはいるけれど自

分の考えに沈みこんでいるように見えた。ときたま自分の横にいる”障害者”に声を掛けようと

するが、言葉がうまく伝わらないようで、動きもぎこちない。

「あのとき、こうだったんだよね、ああだったんだよね・・・。」「なんであそこでこんなこと言っ

ちゃったのかねえ・・・」。訪問のときの経験が、その後も、話の中にときどき出てくる。あるとき、T

が、すっきりした顔で言った。

「分かったよ！私、無理してはりきってたけど、それって、自分の方が優位だってことを一生懸

命自分に証明しようとしてたんだ。つまりさあ、すっごく不安になっちゃってたってこと。」

Y: 「Tも不安になることあるの？」。

T: 「それってひどくない？」

やっぱり二人は仲良しだ。

軋む—その2) どうしていいかわかんないよ

活動の目的とかははっきりしないし、何時から何時まで、誰が責任をもってリードするのか

分からない…そういうの、はっきりしてもらわないと、どうしていいかわかんない。

結局、振り

回されてるとしか思えないよ。

あるときの沖縄ツアーで、言いにくそうに、しかし断固そう苦情を言うM。誰に対して言ってる

か、自分に対する不満をぶちまけようとしているのか、主催者に聞いてほしいのか、友達にな

ぐさめてほしいのか、M自身もはっきりしないようなのだ。

今は、このおばあちゃんに、なにになについて話を聞く時間だから、みんな質問してください

い、とかさあ、そういうのもないし、おばあちゃんに自己紹介してくださいとか主催者が段

取りつけてくれないと…

たしかにMは、皆が勝手気ままに動き回っているとき、《どこに身を置いていいのかわからない》感じで隅の方にたたずんでときどき時計を見ている…そんなことが多い。頭の中をさまざまなことが蠢いているらしい。そのさまざまなことは、すべて「自分は」に返ってきて、「こんな自分の状態を作り

出したのは主催者の責任！」となって多少攻撃的になるようだ。誰も仕切らないんなら勝手に

動いちゃえ、というふうには、とりあえず、ならない。

適応不全と言えば適応不全なんだけれど、自分の軋みにどう対応していいかわからないと

いうことが、もう一つの軋みを生み出す。ぎしぎし、ぎしぎしいってる。

軋む—その3) きっと変なこと言っちゃう

…ぼくは、慰安婦って基本的に信用できないっていうか、もし、そういう人に会ったら、きっ

と変なこと言っちゃう気がします。ナムムの家だって、元の館長さんがセクハラ事件を起こ

したでしょ。そういうことどう思うのなんて、きつい言葉で言っちゃいそうです。…

あるときの韓国ツアーで  
「ナムムの家」に行くことに  
決定したとき、Aが告白調に  
こう話してくれた。説得して  
ほしいような、同意を求める  
ような、でもやっぱり「それ  
は違うよ」と言ってもらいた  
がっているような、解釈が難  
しい言葉を投げかけられて  
私は一瞬引いたけど、何と  
か言葉を出してみた。

私：「じゃあ、行くの、止める？」

A：「…でも、自分がどう反応するのか、怖いものみたさみたいな気もあるんで…」

Aがなぜ私にこう告白し、それでもツアーに参加してナムムの家に行き、ハルモニ  
の証言を  
聞いたのか、今でもよく分からない。結局Aはハルモニに「変なこと言っちゃう」こ  
とはなく終始無  
言だった。もう一度行ってみたいというような素振りも見せなかった。普段自分の中  
で軋んでい  
たものが、からだを運んで出会うことで解消されてしまったのかな。

軋み方はいろいろだ。軋みを見せない人もいるけど、それって、ほんとにまったく  
どこも軋ん  
でないのかな。「とっっても勉強になりました。またこういうのがあったら参加します」  
なんて笑顔  
で言われてしまうこともある。

### 3. 軋（きし）ませる

パウロ・フレイレの思想と実践を受け  
継いだ人の中に、アウグスト・ボワール<sup>3</sup>という人がいる。フレイレが生成語<sup>4</sup>を  
用いた意識化教育を実践したのに対  
して、ボワールは同じ意識化を、演劇  
を通してやろうとした人のようだ。ボワ  
ールの演劇は“見せるための演劇”で  
はなくて、観客も交えて議論したり、考えたりする演劇。言葉で議論したり、文章で  
思索するの  
ではなくて、演劇という擬似世界を造って、その中からからだを入れて議論し考える。

その擬似世界を作り出して、そこに人々を引き込み、方向付けや交通整理をする人を、  
ボワールは「ジョーカー（Joker）」と呼んだ<sup>5</sup>。上の写真は東海大学で2002年にボワールの  
theater forum<sup>6</sup>をやってみたときのJokerさん（中央）。  
ツアーはこのtheater forumにも似ている。からだを向こう側にもって行くけれど、  
どこか  
で「擬似」感（私はツアーだからここにいるのであって、ここに全人格的にコミット  
しているわけで  
はなく、ツアーが終われば抜け出せる…）を残しておく。そしてツアーにもJokerが  
いる。  
フレイレの識字教育について長い間疑問に思ってきたことがある。それは人々を意識  
化す  
るといふとき、まずすでに意識化した  
人たちというのがいて、その人たちが  
ほかの人々を意識  
化する・させるという構造に対しての疑問だ。これって「悟り」の方向は一つしかな  
くて、先駆者  
と後続がいて、どこか硬直してるんじゃないのか—そんな風に思ってきた。90年代に、  
埼玉県  
で外国人住民たちとボワール的な手法をあれこれ試していたときに、仲間にそういう  
疑問を  
話してみたことがある。ジョーカーって、なんだか教師みたいで偉そうだよ、と。  
仲間の中で  
応用演劇やってた人が「ジョーカーはさ、何にでも使えるって役だから確かにほかの  
カードと違  
うけど、でも一枚のカードにすぎないんじゃないの。裏っかわ見たら皆おんなじな  
んだから」と  
これに応じた。  
ツアーの途中で、（うまくいけば）ジョーカーはけっこう交替する。ドラえものよ  
うに、最初か  
ら最後までジョーカーであり続けることは（そういうこともあるにはあるけれど）あ  
まりない。ババ  
抜き<sup>8</sup>みたいに、皆「裏っかわ」が同じに見え始めたら、ババ（ジョーカー）がどこ  
にあるのか分か  
らなくなる。

#### 4. 西遊記する

…ずっとツアーに参加して、なぜ行くのと聞かれたら、ただ「暇だから、参加してい

る」と

答える。そのまま一年を送った。行く理由はわからなかったが、この一年間でいろいろな

ことをやって、なんとなく行きたくなくなった気がする。…

大学でも2001年にツアー中心のクラスを始めた、そのクラスの最後にCが書いた感想だ。

何をしに行くの、目的は何？という質問はどこかで必ず出てくる。ジョーカーとしてこれには適当に答えておく。何とかを見に、とか、誰々に会いに、とか何とか「それらしい」ことを言って「その気にさせる」。それらしさは、とてもたいていせつだ。

「～に行く」、「体（からだ）を～にもって行く」というのを、合目的的行為、あるいはシングル・イ

シュー（single issue “絞り込まれた単一の問題”）活動として考えるのは、いろいろな意味でむ

ずかしい。ドキュメンタリーならシングル・イシューで作れるし、授業というのもシングル・イシュー

で（やろうと思えば）できるかもしれない。でも、自分たちの日常世界から出て外にからだをもっ

ていくときには、何かのシングル・イシュー（単一の目的）を呪文のように唱えていても、それ以

外のことが次々に起こる。三蔵法師たちは「天竺に経文を取りに行く」というシングル・イシュー

で旅をするけれど、だからと言って西遊記を「天竺に経文を取りに行く」物語ですと言っても内

容の説明にならないし、第一、面白くない。

意図した効果が達成できたか。—今流行りの「自己評価」でいけば、こんな質問にも答えな

くてはなくなる。こういうのは一種の流行り病だ。私たちはそもそも意図して生きているわ

けじゃないんだから、と言ってしまったら身もふたもなくなってしまうのだろうけれど、頭で考え

る意図が行動の中で裏切られていくことがなければ、意図を作り出す頭だって硬直するだろ

う。

#### 5. ここはどこ、私は誰

ツアーは一回かぎりの通り魔的なツアーもあるけれど、しつこく同じ「どこでもドア」を往来することもある。2001年から始めた大学のツアークラスでは年によって同じ場所にしつこく行く。

通り魔的なツアーでは、出会う人々の「何what」にしか出会えないことが多い。基隆に行って沖縄人のおばあさんに会ってきた、とか、嘉義に行って被爆者に会ってきた、とか—その人たちは

「沖縄人のおばあさん」や「被爆者」であるかもしれないけれど、こういうのはその人たちの「何what」（彼らは何であるか）の側面であって、「誰who」（彼らが誰であるか）ではない<sup>10</sup>。もちろ

ん人は「何」と「誰」に分裂しているわけじゃないだろうから、「何」を通してその人の「誰」も少し

は見えてくる。でも、相手にとってもこっちの「誰」が見えるのかと言えば、それは（すくなくとも集

団で行くツアーでは）あまり期待できない。

しつこく同じ人に会うと、これが少しずつ、できるのかもしれない。会う回数は関係ない場合

だってある。「沖縄人のおばあさん」や「被爆者」や「原住民」という「何」の向こう側に、人を見

つけていく。相手もまた、こちらをツアーする人という「何」から、名前を持った「誰」かとして受

け止めてくれる。そうしたらツアーという概念も発展的に解消する。「どこでもドア」の代わりに、

地続きの道が見えてくる。そして別のツアーが始まる。

…以前は「台湾人とはどんな人だ

ろうか」と聞かれたとき、「自然に」

閩南人も、原住民も、客家人も、み

んな台湾人だと思いましたが、今、

全然わからなくなりました。いったい

誰が資格を持つことができて、自

分を、また、ほかの人を「台湾人」

だと分けられるのでしょうか。私は

誰か。昔、とてもはっきりしていたようなことが、今あいまいになりました。でも聞く人が異な

ったら、気持ちも違います。例えば、沖縄にいたとき、「私たちは台湾から来ました。」と答え

られました。でも、そういう言い方は、今は好きではありませんが。微妙です。【山<sup>11</sup>の】教会

や礼拝にいる間に、とても知りたかったのは、【山の】子供や大人は私たちが台湾の身分証

明書を持っている人のことをどう考えているのでしょうか。また、日本のパスポートを持っ

ている人たち（一応）をどう考えるのでしょうか。「あなたはどこからきたのか」という質問に

対して、いったいどう答えたらいいのでしょうか、今でも答えがありません。…（ボールド、【 】

内は古川による補足）

これは2006年10月の「山のツアー」でのHさんの感想の一部。同じツアーの感想でRさんは

次のように書いた。

これをきっかけにどうやって山の人たちと向き合えば/向き合ってもらえばいいのだろうか。

どんな私で話せばいいのだろうか。それともこんなことは考えずにそのまま向き

合っていくのが一番いいのだろうか。このままの私で向き合うとしたら、向き合っ

てくれるのだろうか。それとも何か考えてするのではなく、向かい合いながら今の自分にできる

ことを模索していくのが一番なのかな。（ボールドは古川）

文章になった感想は多少意識過剰になるし、読まれることを意識して美化もされる。軋みや

揺らぎは、そんなに簡単に文章にならない。しかし、少なくとも、HさんやRさんの、自分の軋み

や揺らぎを言葉にしておこうという勢いは分かる。Rさんの的に言えば「向き合おう」と自分に言

うことがコミットメント<sup>12</sup>（の始まり）なのかもしれない。それは他者へのコミットメントでもあり、自分

へのコミットメントでもあるのだろう。

コミットメントは「どこでもドア」の代

わりに地続きの道を作り出すと思うけど、その意味は、ちょっと日常感覚とは違っているかもしれない。すでにあるここが、すでにある向こうと、地続きでつながるんじゃないかと、ここも向こうも、ツアーする人の中でその一体性が軋んで、揺らいで、道ができていくとでも言ったらいいのかもしれない。

#### 6. どこでもドアという道具

グローバリゼーションでみんなが自由に世界中を動けるようになってよかったねえ、というのが幻想だというのと同様に、ツアーがどこでもドアを通して人と人を結びつけて関係を変えていく、というのも幻想だ。幻想というのが曖昧なら、現実歪曲というか、一つの側面だけを取り出しての誇大広告だ。でも、幻想は、何か

44

をするための道具として作り出される。ツアーがダメなら別のものでいい。別の道具をもってあげればいい。ヘゲモニーはいつでも軋まないこと、揺らがないことを人生の（社会の／教育の）目的とせよと圧力をかけてきて、周辺あたりで軋み、揺らぐ人は救済されなくてはならないあわれな存在にされてしまう。そうであるなら強いヘゲモニーの下に生まれ育った人々が、例えば「どこでもドア」を通して軋んだり揺らいだりすることに積極的な意味を与えてみるのも（とりあえず今できそうなこととしては）いいのではないかなどと考えてみる。

（ふるかわ ちかし 東海大学日本語文学系）

注

1 「ドラえもん」は、藤子・F・不二雄の漫画のタイトルであり、主人公の名前でもある。1969年、小学館発行『よいこ』『幼稚園』『小学一年生』『小学二年生』『小学三年生』『小学四年生』に連載開始。1973年にテレビアニメ化。

2 C.S. Lewis 1950 The Lion, the Witch and the Wardrobe (The Chronicles of Narnia)

3 アウグスト・ボアールは、1931年生まれのブラジルの演出家。新しい形の演劇を生み出しサンパウロのアリーナ劇場で1956-71年まで芸術監督を務めた。ブラジル政府から弾圧され、投獄、拷問を受けるなどの経験をしてアルゼンチンへ亡命。その後、ポルトガルを経て、パリへ。以来、世界各地で講演、ワークショップと数多くの公演を行い2009年に死去。

4 生成語 (generative words) あるいは生成テーマ (generative themes) は、それらを通して被抑圧者が自分たちの置かれた状況から世界を解釈するための、引き金となり得る語彙、あるいは話題。フレイレの識字教育の基本的な道具立ての一つだ。

5 一時の学習活動論で、教師はティーチャー (teacher) ではなくてファシリテーター (facilitator) であるべきだ、と言われた。学習活動そのものは「学習者」が自分たちで進めることができるように“与えられて”いて、その活動を支障なく行うための情報提供や援助、方向付け (シープ・ドッグ) などをしてしながら煽る役割。活動を“与える”役割についてはファシリテーターという言葉には含まれていないけれど、それも実際上は教師＝ファシリテーターの仕事。演劇でも、授業でも、誰かが主導的にやって残りの人は受動的にそれを受ける、という形を嫌うところから、こうした言葉が使われるのだろう。

6 Forum theaterという呼び方もあるようだ。問題の解決策を「からだでディスカッション」するための劇、といわれる。

7 裏側。

8 ババ抜き (ババぬき : Old Maid) はトランプの遊び方のひとつ。ジョーカー (ババ) を最後まで持っていた人が負ける。

9 説明責任 (accountability) というものが、意図と行為そのものの絶対的な関係の中に成立する概念だと考えるのは間違いだ。それは行為を取り巻く社会的な関係の中に初めて成立するのだから。そうであれば説明責任を重視する姿勢を頭から「病気」と呼ぶことはもちろん妥当ではない。しかし、説明責任重視の人々が自らの拠って立つ社会的な関係そのものについては考慮外において (全面的に肯定して)、あたかも意図と行為の間の絶対的な関係を評価している気分になっているとすれば、それは「病気」と呼ぶしかない。

10 what と whoという言葉は、アレントに拠っている。ハンナ・アレント、「人間の条件」志水速雄訳、中央公論社、1973年／筑摩書房 [ちくま学芸文庫]、1994年。

11 「山」は南投縣霧社近辺のこと。

12 約束、義務、責務、債務、かかわりあい—訳語を使うと意味が限定的になるから、とりあえずカタカナ語として使っておきたい。